



# ヤメルトキモ



ナカノリエ

「今朝はいいから」と彼が照れ笑いしながらお腹をさすったり。  
ん？と一瞬だけなって、ああ、そうだった、昨日は焼き肉、食べ放題だったと思  
出した。

彼は外食しない派だった。  
最初はそれが不満で仕方なかった。  
素敵な雰囲気でおいしい食事をして、何がいけないんだろう。  
贅沢だというけれど、あなたとだからそうしたいのに。  
意見は平行線のまま時間は経った。

彼の「しない派」は外食だけではなかった。  
外出しない派でもあった。  
お出かけ大好きな私としてはつまらない。  
外出しても、目的を果たしたらそれで終わり。  
寄り道しないでまっすぐ帰る。  
あちこち見て歩くこともしない。  
私の大好きな、あちこち見て、素敵なものに触れて、ちょっとお買い物、というの  
が彼の時間の中には全くない。

このままやっていけるかしら？  
不満は募る。

最初は我慢していたけれど、そのうちお出かけは一人でするものになかった。  
一人だと意外性が出ないのツマラナイ！  
そのうち彼に似て、決まったところだけ行くようになり、買い物も決まったところ  
だけの出来事になった。

そのうち、一人で外食するようになった。  
ランチならなんとかなる。  
いつの間にかあっと言うほど体重が増えた。  
おしゃべりせずに、食べるのであまりゆっくり食べていないのだ。  
ランチのお茶とデザートも体重に加わることになった。

マズイなあ。

お出かけはお散歩にして、ランチの代わりに泳ぐことにした。

水の中は最高に気持ちがいい。

最初はめったやたらに泳いでいたけれど、

ある時、クラスに参加してみた。

そこでそれまでのフォームが余りにも自己流で負担になっていることがわかった。

コーチの指導を受けながら、泳ぎを改造するのはナカナカ難しかった。

「意識をすると全然違いますよ」と言われるのだけれど、ナカナカカラダに馴染まない。

クロールや背泳ぎはまだよかった。

平泳ぎやバタフライはカラダの動かし方が全く違うので、大きな課題だった。

とはいえ、さほど深刻に思い詰めることもなかった。

毎週、違う年代の同じ顔触れの方たちと、同じ目的で集まる。

褒めてくれたり、励ましてもらったり、不思議と可愛がられた。

ある時、フォームの撮影会があった。

撮影してもらうまでもなく下手なのだけど、楽しそうなので参加した。

普段はやらない飛び込みもした。

ゴーグルがズレた。

撮影は一人一回と決まっているので、泳ぎ続けるしかない。そう思って、泳ぎ続けた。

水から上がったら、いつも練習していらっしゃる、いかにも速そうな方が大きな声で話しかけてきた。

「あんたの根性は認めた。ゴーグルがズレてるのに泳ぐんだもの、驚いた。でも、今日は大会じゃない、やり直してもよかったのよ。」

と。

泳ぎ直してもよかったのか。

声をかけてもらったことが、うれしかった。

でも、今思えば、案内しなかったコーチ達に気遣うように促したのかもしれない

。

だとしてもうれしかった。

そんな風にやわらかい繋がりが広がって、包まれて、いつの間にか大事にされていた。

いつの間にか、彼から、今週は出かけようか、と誘われるようになった。

だいたい行き先は本屋さんと決まっているのだけれども、ネットだけで本を探すより、出会いがあって楽しい。

いつの間にか、彼からお腹がすいたねとお昼を食べるのに誘われるようになった。

デザートは帰りにコンビニで何か買って帰るので、家でコーヒーを淹れる。

はい、とコーヒーを出すとはとてもうれしそうにする。

出会って早々、つきあってください、と言われるのかなあと思ったら、出てきた言葉は、「結婚してください」だった。

デートでデザートも食べない人とやっていけるかしらと思ったけれど、

彼はこうして私にコーヒーを淹れて欲しかったのだ。

一時は、パンパンに膨らんだ指をちぎらんばかりだった、指輪も今はよく馴染んでいる。

そして、いつの間にか、泳ぎもカラダに馴染んできて、今はもう、平泳ぎもバタフライもへっちゃら。

「あなたのこんなキレイなクロールを見られるなんてね」

と仲間から声をかけられる。

うれしい。

コーチに何を言われても、その中の一つだけ意識すれば、なんとかそれなりに形にはなるようになった。

いいのだ、長く続けるのだから、なにも急いではない。

そういえば、数年前の昨日、私たちはごく親しい人たちだけに来てもらって、小さな結婚式をした。

まだあの時ほどは細くないけれど、なにも急いではない。

ましてやお祝いで焼き肉食べ放題じゃ、体重増えちゃうね。

私たちはなにも急がなくていいのだ。

病める時も、健やかなる時も。